

## 要 旨

## 織田作之助『夫婦善哉』論

9N14001

浅岡 瑠衣

織田作之助の出世作といえる「夫婦善哉」は、昭和十五年四月に雑誌「海風」に発表された作品である。この作品は大阪を舞台とし、織田の次姉にあたる千代と、夫であった山市市次をモデルにしたと言われている。

発表当時は「ひねこびた文体」の「風俗小説」として評価がなされていた。確かに織田の文体は「ひねこびた文体」と言われるほど、特徴的である。そのように非難された原因は、名詞の列挙や地の文と会話文の融合、作者が登場人物の心情に立ち入らず読者と登場人物の距離を近づけようとした文体にあった。文体の試行錯誤は「夫婦善哉」を発表して以降の評論で織田自身も語っている。実際に「夫婦善哉」発表までに書かれた作品（「ひとりすまう」昭和十三年二月『海風』第三号、「雨」昭和十三年十一月『海風』第五号、「俗臭」昭和十四年九月『海風』第六号）の変遷や、初出から作品集『夫婦善哉』（昭和十五年八月刊）に収める際の書き換えを見れば、試行錯誤なされたことが一目瞭然である。また、初出の「夫婦善哉」に関しても草稿と比較すると、作者が登場人物の心情に立ち入らない描き方に変更されていることがわかる。そして、この文体的な特徴は、織田の文学に対する思想とも大きな関わりがある。

「夫婦善哉」はあくまで次姉夫婦をモデルとしているだけであって、次姉夫婦生活がそのまま書かれているわけではない。織田によって取捨選択された出来事が描かれているのである。本稿では「夫婦善哉」の年立てを整理し、織田家の実生活と作品を比較した。その中には、異なる点もあった。作品では織田自身も登場しているが、進学せずに働きに出ている。第三高等学校に進学させず、働かせることによって織田家にあった上昇志向を消し去り、貧困な状況を描いているのである。このような書き換えは、織田が「夫婦善哉」で庶民の大阪人像を描き出そうとしたからである。そのた

めに、書かれている時代も昭和十五年当時ではなく「架空の大阪」を描く必要性があった。同時に織田は昭和十五年以前の大阪に郷愁の念を持っていたとも言える。織田にとって故郷の大阪を題材に作品を描くことは、東京文壇の地方文学を否定することでもあった。織田は「東京のインテリゲンチヤ臭味に統一されて」いる文壇を良しとしていなかったことも窺える。その思想を反映させた作品が「夫婦善哉」であった。

つまり、「夫婦善哉」という作品から、織田の文体的特徴と思想が密接に関係しているといえるのである。